

杜甫「春望」の頷聯について

後藤 秋正

はじめに

至徳二載（七五七）三月の作とされる、杜甫「春望」の頷聯は、「感時花濺淚、恨別鳥驚心」と詠じられる。

この二句について、「濺」「驚」の主語（主体）をどのようにとるかによって大きく二つの解釈に分かれることは、よく知られている。例えば『校注唐詩解詁辭典』（大修館書店、一九八七）「春望」の執筆は宇野直人。以下、『解詁辭典』は「諸説の異同」で、二句の解釈を以下のように整理している。

A 作者が、花を見ても涙を流し、鳥の声を聞いても心を痛める。

B 花も涙を流すかのようにはらはらと散り、鳥も心を痛めているかのように啼く。

A説では、「時に感じては花にも涙を濺ぎ、別れを恨ん

では鳥にも心を驚かす」と読み、B説では、「時に感じて花（は）涙を濺ぎ、別れを恨んで鳥（は）心を驚かす」と読むことになるのも周知のことであろう。A説に従うものは枚挙に暇がないのでここでは省略するが、B説をとるものとして「解詁辭典」は以下を挙げている。^{①②}

南宋・羅大経『鶴林玉露』卷一〇、世阿弥『俊寛』、齋藤勇『杜甫 その人、その詩』（研究社、一九四六）、吉川幸次郎『杜甫詩注』第三冊（筑摩書房、一九七九）、楊磊『詠点唐詩』、劉若愚『新しい漢詩鑑賞法』（佐藤保訳、大修館書店、一九七二）、入谷仙介『唐詩名作選』（日中出版、一九八三）、上田三四二『花に逢う歳月のうた』―「花と鳥」（平凡社、一九八三）

なお『解詁辭典』は、「仮に頷聯をB説のように解した場合、やや遊戯的な印象が混じり、全体の緊迫した流れが甘くなってしまうように思われる。それは、擬人化という

手法が、対象の知的操作に負う面が強く、そこに精神の余裕を感じさせてしまうからであろう。」と述べ、A説に従っている。

『解釈辞典』の見解に異を唱えようとするわけではない。しかしこの辞典が刊行されてから既に三十年近くが経過していることもあり、いくつかがことが補えそうである。そこで、これまでの指摘には見られなかった事柄について補足しながら、疑問点も含めて以下に述べてみたい。

—

川合康三『杜甫』（岩波新書、二〇一二）において、以下のような見解が示された。川合氏はA・B両説を比較して、次のように言う。少々長くなるが引用しておこう。

吉川幸次郎・三好達治『新唐詩選』ではこの二句について、「時に感じて花も涙を濺ぎ、別れを恨みて鳥も心を驚かす」と読んでいる。早くは謡曲「俊寛」のなかでもそう読まれていると、ほかならぬ吉川先生からうかがったことがあるが、花と鳥を主体とする魅力的な解釈ではある。……日本語にしようとする、「花も」と読むか「花にも」と読むか決めなくてはならない。……「感時」「恨別」の主体は詩の発語者ともと

れるし、花や鳥ともとれる。「濺涙」「驚心」も同様である。語と語の関わり方を明示する指標がないのだから、もともと動作の主体が何か一つに限定されていないのだ。発語者と花・鳥とが主客混淆した関係のなかで自他の区別が消滅する。その曖昧な言い方が、人（発語者）と物（花と鳥）の日常的な役割分担、ふつうだったら人が花や鳥に心を動かす、その関係性を壊して花や鳥が人の世界に心を動かすという可能性を抱え込むかのように思われる。つまり関係を明示する指標を必要としない言語であるために、人と物の関係が多義的になりえている。

「発語者と花・鳥とが主客混淆した関係のなかで自他の区別が消滅する」とする見解は注目されようが、仮に杜甫が当初から曖昧な表現を意図したとしても、日本語に移そうとすると「発語者」か「花・鳥」かのどちらかを主語として読まなくてはならない。「主客混淆した」ことを踏まえて読むとすれば、どのような読みになるのであろうか。この見解を読み返して反映させることは非常に困難である。川合氏の見解は、A説とB説に即して言えば、この両者を統合した、C説と呼ぶべきものとなっている。ただし、このような見解は川合氏の独創とばかりは言えない。例えば陶

道恕主編『杜甫詩歌賞析集』（巴蜀書社、一九九三。「春望」の担当は、宛敏灝・鄧小軍）は「人」と「自然」が融合した句であるとして、次のように述べている。

由于構思細密、文字精煉、因而具有多層意蘊。……
從詩歌美学的角度來說、這一聯詩体现了「以我觀物、則物皆着我之色彩」（王国維「人間詞話」）的移情作用、而從文化化学的角度來說、這一聯詩實際上反映了人与自然相融合的中国文化的傳統精神。

二

さて読み方について言えば、『解釈辞典』が述べるようなA説とB説だけに限られるわけではない。小杉放庵（未醒。一八一〇～一九六四）の『唐詩及唐詩人』（書物展望社、一九三九・九、初版）は、「時に感じては花に涙をそそぎ、別れを恨みては鳥も心を驚かす」と読んでいる。主語はそれぞれ第三句が杜甫、第四句が鳥ということになり、いわばA説とB説を折衷した読み方になっている。ただし、このように読む根拠は示されていない。ただ第三句、「花に」が「花も」の、第四句「鳥も」が「鳥にも」の誤植である可能性も否定できない。そこで他の刊本を確認したところ、少なくとも『唐詩及唐詩人』（書物展望社、一九四〇・三、

訂正印刷、同、和紙版発行）、『唐詩及唐詩人 上巻』（青磁社、一九四七）と『唐詩及唐詩人』（角川文庫、一九五四再版）においては、変更されていない。放庵はどのようにこのように第三句の主語を杜甫、第四句の主語を鳥としたのであろうか。あるいは、鳥は動物であって心を有するが、花は植物であって心を有しないと考えたからであろうか。また、ここで付言しておく、この句を使役的用法であると見なす王力『漢語詩律学』の見解については、野口宗親「杜甫『春望』の濺淚について」（熊本大学教育学部紀要人文科学四三、一九九四）、及び同氏「杜甫『春望』の驚心について」（熊本大学教育学部「国語国文 研究と教育」三二、一九九五）に詳細な言及がある。また馮至「杜甫詩選」（一九五六初版、大光出版社、一九七四再版）も使役的用法であると見なし、それぞれの句の語釈においては「因為感傷国事、見到春日花開爛漫、反而使人流淚。」「和家人們離隔很久、聽到春鳥和鳴、反而使人驚心。」と述べている。ただし、信応拳「杜詩新補注」（中州古籍出版社、二〇〇二）は王力の説に言及し、「不可以現代語法繩之。」と言ってこの読みを否定している。王力説に従えば、「時に感じて花は〔杜甫に〕涙を濺がしめ、別れを恨みて鳥は〔杜甫に〕心を驚かしむ」となる。いずれにせよ、これ

でこの聯に関するば全ての読み方が出そろったことになる。

三

吉川幸次郎『杜甫詩注』第三冊（筑摩書房、一九七九）

は、「また私と同じ読み方が、過去にもある。」と述べた上で、早くから行われた説として、初めに、宝慶二年（一二二六）の進士、羅大経の隨筆、『鶴林玉露』十の説を挙げる。まず、これについて検討してみたい。『鶴林玉露』の「詩興」の条には次のようにある。

詩莫尚乎興、聖人言語、亦有專是興者。……今姑以杜陵詩言之、「発潭州」云、「岸花飛送客、檐燕語留人」。蓋因飛花語燕、傷人情之薄。言送客留人、止有燕与花耳。此賦也、亦興也。若「感時花濺淚、恨別鳥驚心」、則賦而非興矣。

詩は興より尚きは莫し、聖人の言語も、亦是の興を専らにする者有り。……今姑く杜陵の詩を以て之を言うに、「潭州を発す」に云う、「岸花飛びて客を送り、檐燕語りて人を留む」と。蓋し飛花・語燕に因りて、人情の薄きことを傷む。言うところは客を送り人を留むるに、止だ燕と花と有るのみ。此れ賦なり、亦興な

り。「感時花濺淚、恨別鳥驚心」の若きは、則ち賦にして興に非ざるなり。

果たしてこの一文から、羅大経は「濺ぐ」の主体が花であり、「驚かす」の主体が鳥であると解釈していると理解してよいのであろうか。羅大経は、「興」とは心に触れ感じた事柄を他のものに事寄せて表現したものであり、表面的には「比賦」と同様に見ることがあると述べてはいるが、「濺ぐ」の主体が花であり、「驚かす」の主体が鳥であることを指摘しているわけではない。「春望」の当該二句の前に引かれる「潭州を発す」（『杜詩詳注』卷二二。以下、『詳注』）の領聯で、花が杜甫を見送り、燕が杜甫を引き留めることを言って、明らかに擬人法を用いていることに引きられた可能性は考えられないだろうか。ただしこの聯も、言外に人々の情が薄いために、杜甫（自身）を見送り引き留めてくれるのは花と燕だけだという含意があるのであって、羅大経はこの点において「賦」でありながら「興」を兼ねていることを認めているのである。「春望」の当該二句もこれが「賦」であり、「興」ではないことを指摘するだけであって擬人法であるとの指摘はない。「賦」であるから擬人法であると見なすのは早急であろう。こう考えるのに根拠がないわけではない。和刻本『鶴林玉露』はこ

の聯を、「時ヲ感ジテハ花ニモ涙ヲ濺ギ、別ヲ恨テハ鳥ニモ心ヲ驚ス」と読んでいるのである。

四

では「鶴林玉露」以前に領聯の主語を花と鳥であるとする見解は見られないのであろうか。そもそも「花鳥」が擬人的に詠じられることは吉川氏も、「かく花や鳥を擬人化することは、無理であると疑うならば、例は他の唐詩からも挙げ得るのであって、……。」と述べ、王維「既蒙宥罪、旋復拜官、……」（『全唐詩』卷一二八）と常建「破山寺後禪院」（『全唐詩』卷一四四）から用例を引いているが、『全唐詩』においてはほかにも見出すことができる。

冬至冰霜俱怨別 冬至りて冰霜 俱に別れを怨み
春来花鳥若為情 春来りて花鳥 情を為すが若し

崔日用「錢塘永昌」（卷四六）

花鳥惜芳菲 花鳥は芳菲を惜しみ

鳥鳴花乱飛 鳥鳴き花乱れ飛ぶ

劉希夷「代閨人春日」（卷八二）

年年洛陽陌 年年 洛陽の陌

花鳥弄婦人 花鳥 婦人を弄す

盧僕「途中」（一作郭向詩。卷九九）

これらの例はすべて「花鳥」を擬人化していると考えてよいだろう。これら以外にも、杜審言（六四八？〜七〇八）の「渡湘江」（『全唐詩』卷六二）には次の句がある。

遲日林亭非旧遊 遲日 林亭 旧遊に非ず

今春花鳥作辺愁 今春 花鳥 辺愁を作す

「春望」の諸注は、杜審言の詩を挙げないが、杜甫の七律「江上值水如海勢、聊短述」（『詳注』卷一〇）の領聯には次のように言う。

老去詩篇渾漫与 老い去きて詩篇 渾て漫与なり

春来花鳥莫深愁 春来りて花鳥 深く愁うる莫かれ

「春来」の句は杜審言に学んだものであろう。「江上值水如海勢、聊短述」の第四句について「詳注」は、「不須対花鳥而苦吟愁思矣（花鳥に対して苦吟・愁思するを須いず。）」と言っているから、もしこれに従えば、「花鳥に〔を〕深く愁うる莫かれ」と読むことになるだろう。しかし「詳注」は次の一文を引いた上で否定するのだが、趙次公の注に、「將愁字属花鳥説、蓋詩人形容刻露、花鳥亦応愁怕、猶崔日用詩、朝来花鳥若有情也（愁の字を將て花鳥に属して説う、蓋し詩人の形容は刻露し、花鳥も亦応に愁怕すべし、猶お崔日用の詩の、朝来 花鳥 情有るが若しのごときなり。）」とあるように、「深く愁う」の主語を花

鳥とする見解もあった。つまり花鳥を心あるものとみなす見方はそれほど稀少なものではなかったのである。

なお後になると明らかに杜甫「春望」を意識して作られたと考えられる例も見られる。紹聖四年（一〇九七）の進士、葛勝仲、字は魯卿の七律「春日野歩二首」〈其二〉（『丹陽集』卷二一）の頷聯には、次のように言う。

嫵媚花枝空濺淚 嫵媚たる花枝は空しく涙を濺ぎ
風流柳色但牽情 風流なる柳色は但だ情を牽く

仮に読んでおいたが、この句は「花枝」と「柳色」が主語となつていように読める。「嫵媚」の句が杜甫「春望」を意識していることは疑いない。葛勝仲には、「余謫沙陽、地僻家遠遇寒食、……感而賦詩五首、以杜子美無家對寒食五字為韻」（『丹陽集』卷一六）があつて、杜甫「一百五日夜、對月」（『詳注』卷四）の冒頭の句を韻字とした五律の連作を試みているし、「次韻堯卿兄詩酒中興三首」〈其三〉（『丹陽集』卷二〇）では、「伯倫子美真豪逸、風味平生願執鞭」（伯倫と子美とは真の豪逸、風味 平生 執鞭を願う）とあることからその杜詩への理解と傾倒ぶりがうかがわれるからである。さらに南宋・宝祐四年（一二五六）の進士、陳著、字は子微の「弟漑飲至醉、醉歸蹶道中荆棘中」（『本堂集』卷三一）に見える次の句はどうであろうか。

少陵非愛牛炙酒 少陵は牛炙と酒とを愛するに非ず
花鳥感時詩淚瀉 花鳥は時に感じて詩淚瀉ぐ

「詩淚」は見慣れない語だが、この句も「花鳥」を主語として読めないだろうか。陳著も杜詩に造詣が深く、杜甫にしばしば言及しており、例えば「杜工部詩有送弟觀歸藍田迎新婦二首、……」（『本堂集』卷八）という詩があるほか、「關戴師初食長齋」（『本堂集』卷三〇）では、「漂泊無家杜少陵、兵間奔走隨蓬萍」（漂泊して家無し杜少陵、兵間 奔走して蓬萍に隨う）と詠じている。

五

『鶴林玉露』について吉川氏が挙げるのは、川合氏も言及していたように、室町時代中期の作とされる謡曲「俊寛」⁽⁸⁾であつて、西野春雄校注『謡曲百番』（岩波書店、一九九八）が観世元雅（一三九四？～一四三二）の作とする「俊寛」には、「時を感じては、花も涙を濺ぎ、別れを恨みては、鳥も心を動かせり。」とある。その後吉川氏が挙げるのは、氏の言及をそのまま書き写せば、「洪業氏の『Tu Fu, China's Greatest Poet, 1952, p. 89, 劉若愚氏の『The Art of Chinese poetry, 1962, p. 149, ナイヴィット、ホークス氏の『A Little Primer of Tu Fu, 1967, p. 48.』であつて、すべ

て戦後の書物である。「解釈辞典」が挙げていたものも戦後の書物という点では同様であった。斎藤勇「杜甫 その人、その詩」は、「時に感じては花も涙を濺ぎ、別れを恨んで鳥も心を驚かす。」と読み、司馬光「温公詩話」を引いて、「花鳥はいつも娛しみの象徴であるのに、今は花や鳥でさへ泣いたり悲しんだりしてゐるといふのであるからこの二行だけでも既に胸一杯の感懐を言外に托してゐるのである。」と述べるが、このように読んだことについての説明はない。⁽⁹⁾

なお一海知義「春望」(『漢詩一日一首』平凡社、一九七六)は、A B両説に分かれることを述べたあとに吉川氏の発言を引き、以下のように指摘する。

私自身の理屈も、なくはない。それは、詩にうたわれる「自然と人事のバランス説」とよんでもよい。中国の詩、ことに絶句とか律詩とよばれる詩型では、前半で「自然」をうたい、後半に至ってはじめて「人事」をうたう場合がすくなくない。……自然のたたずまいをもつてうたいおこす本詩「春望」も、またその系列に入れてよい。とすれば、前半の四句には、人間はまだ登場してはならぬ、涙を流し心を驚かすのは人間杜甫でなく、花であり鳥でなければならぬ、というのが、

私の理屈であり、私が花鳥主格説に傾く理由の、第三である。「時に感じては花も涙を濺ぎ、別れを恨んで鳥も心を驚かす」。

一海氏は『漢詩入門』(岩波ジュニア新書、一九九八)においてもほぼ同様の見解を重ねて述べている。

六

中島和歌子「中学校国語教科書における古典教材の選択と指導法について―「おくのほそ道」と他の詩歌の連環を中心に―」(『札幌国語研究』一二、北海道教育大学国語国文学会・札幌、二〇〇七)は、一海氏と吉川氏の所説に触れた後で、次のように指摘する(傍線は原文のママ)。

吉川氏は、この対句が日本でも早くから読まれた南宋の羅大経の随筆『鶴林玉露』に擬人化の例として挙げられていることを紹介し、世阿弥作の謡曲「俊寛」の、俊寛だけが大便に漏れたとわかった場面に、「時を感じては、花も涙を濺ぎ、別れを恨みては、鳥も心を動かせり。(中略)この島の鳥獸も、鳴くはわれを訪ふやらん」とあるのも、その影響かと述べられている(氏の引用は対句のみ)。他にも、「春望」の対句を「行春や鳥啼魚の目ハ泪」の典故として挙げる古注釈

書のうち、「奥細道菅菰抄」は「花モ・鳥モ」と訓んでいた。

中島氏が指摘するとおり、高橋（簑笠庵）梨一『奥細道菅菰抄』は、「行春や鳥啼キ魚の目ハ泪」の句について、

杜甫カ春望ノ詩ニ、時ヲ感ジテハ花モ涙ヲ濺ギ、別ヲ恨テハ鳥モ心ヲ驚カス、……是等を趣向の句なるべし¹⁰

と述べている。「奥細道菅菰抄」（勉誠社文庫二二二、一九八四）に付された大内初夫氏の「解説」によれば、高橋梨一（一七一三〜一七八三）の著になる同書は、「おくのほそ道」の注釈書としては宝暦九年（一七五九）に著された武田村径『おくのほそ道鈔』に次ぐものであり、安永五年（一七七六）に成立し、同七年（一七七八）に刊行された。これも江戸時代中期には花と鳥を主語とする読み方が存在した証拠となろう。

七

しかしながら吉川氏に先行してこの聯を擬人法に読んだ例は、やはり少ないと言えそうである。ところが管見によれば、擬人法に読んだ例はこれだけにとどまらない。

未完の大作「大菩薩峠」の作者として知られる中里介山

（一八八五〜一九四四）の「漢詩提唱（杜甫）」（隣人社¹¹一九三七）にこの一聯について、次のような指摘がある。稀覯書というほどではないが、この書物に言及されることがほとんどないので、当該の聯について述べた部分を引用しておこう。

日本第一の詩人と称すべき芭蕉の如きも杜甫に負ふところが甚だ多いのである。¹²……これは有名な「奥の細道」のうちの名文章であるが、この中に如何に杜甫の影が多く射してゐるか、むしろ芭蕉と杜甫との合唱と称すべきものがある。如何に芭蕉が杜甫に共鳴し感化せられてゐるかといふことは、この一節を以てしても極めてよく分るのであるが、こゝにその淵源を成してゐる杜甫の原作を掲げて見る。¹³……

……時に感じては花涙を濺ぎ。別を恨んでは鳥心を驚かす。……

序にいふが、ある書物に此の詩を和訓にして、第三句及び四句を、「時に感じては花にも涙を濺ぎ、別を恨んでは鳥にも心を驚かす」とにもを添へて読ましてあつた、揚足を取るわけではないが、これは余計なことである、こゝは、人を主格とせずして花鳥を主格としなければ妙味が失はれてしまふ、時に感じ別を恨ん

で人間が花や鳥に向つて傷心の思ひを寄せるのではなく、時に感じ別を恨んで心なき花も鳥も心を傷ましめるといふことになつて一層詩の妙味が現れて来るのである、詩などといふものは一字一句の置き違ひ読み違ひにも多大の価値を生じて来ることは特に李杜あたりの名詩に於ては其の都度切実に感ぜらるることである。

芭蕉の名句に

ゆく春や鳥啼き魚の目は泪

といふのがある、これは芭蕉句中でも特に名吟のうちに属するものだが、「魚の目に涙」といふことが、杜甫の右の二句に負う処がありとしても更にそれとは別なるところの洗練がある。花が啼き、鳥が驚き、魚の目に涙がある、すべて無心のものに有心を付与したところに深い味ひがあるのである、魚を見て、人間の目に涙が宿るでは何にもならぬ。

介山は漢詩に深い関心を寄せており、『漢詩提唱（杜甫）』を刊行する前年の十一月には『漢詩提唱（李白）』を、『漢詩提唱（杜甫）』が刊行された四カ月後の同年六月には『漢詩提唱（白樂天）』を刊行している。

介山は「花鳥」を主語として読むヒントをどこから得たのであろうか。『漢詩提唱（杜甫）』百一頁以下には杜甫の

詩に関する諸家の評論などを引用している。人物と書物を列挙しよう。

王安石、元稹、白樂天、『唐宋詩醇』、傳与礪、『詩藪』、蘇子瞻¹⁶、陶開虞、嚴滄浪、秦淮海、宋祁、『新唐書』本伝、趙翼、清・乾隆帝

介山がこれらをどこから引用したのか、はつきりしないが、書名を挙げないものうちに『詳注』『諸家論杜』からの引用が含まれていることは確かである。このほか唯一、日本人の名が見えるのは森槐南（八三頁）である。介山は森槐南『杜詩講義』中巻の「投贈哥舒開府二十韻」に関する解説の中から、長律において杜甫の占める位置について森槐南が述べた部分を十八行にわたって引用している。このことから介山が『杜詩講義』に目を通していたことは間違いない。しかし、森槐南は「春望」の当該の聯（上巻一四頁）について、

……元来国破れて山河在り其間に居ります我も亦時を慨して居りますから花を見て涙を濺ぐ種となり、夫から別を恨んで居ります我身のことでありまするに依つて、鳥を聞いても心を驚すところの媒と相成りますものであるが眼に触れ耳に聴くところのもの何れも悲感を惹かざるなしと申します次第で、……。

と述べている。同書は杜甫の詩に返り点を付して引用するが、書き下し文はない。しかし森槐南は、主語は杜甫であると解しているのであって、介山がこの見解を踏襲することはない。つまり介山には特定の書物に拠って杜詩を解釈しようとする意図はなかったのではなからうか。それが「春望」の領聯を擬人法に読んだ要因となつていよう。

付記しておくならば、このほか、B説で管見に入つたもののうち、中国の研究者のものとしては、林庚・馮沅君主編『中国歴代詩歌選 上編(二)』(人民文学出版社、一九六四第一版、一九九一第一八次印刷)がある。これははつきりと擬人法であると認め、以下のように述べる。

「感時」二句、是擬人写法、意思是、自己感歎時局、見花而潸淚、覺得花也在潸淚、悵悵離別、聞鳥而驚心、覺得鳥也在心驚。

また葛曉音『杜甫詩選評』(上海古籍出版社、二〇一一)もB説に加えられる。同書は以下のように述べている。

但是山河草木雖然無情、詩人却使它們都變成了有情之物、花鳥会同詩人一樣因感時而潸淚、因恨別而傷心。足見人間深重的苦難也難能驚動造化。花兒帶露・鳥兒啼鳴不過是自然現象、而所潸之泪和所驚之心實出自詩人。因此花和鳥的潸泪和驚心只是人的移情。

花が涙を潸ぎ、鳥が心を驚かすというのは杜甫の感情が投影したものだといふのである。

おわりに

既に述べてきたことと重なるが、小杉放庵と中里介山の読み方を紹介した研究を算閲にして知らない。放庵の書物は先に述べたように、戦後も出版社を変更して刊行されているから、一定の読者層を有したことは確実である。一方、介山の書物が紹介されなかったのは、その影響がかなり限定的であつたことを示しているかもしれない。しかし、以上に見てきたように、「春望」の領聯の読みは、C説を別とすれば、決してA Bのうちのどちらか一方の説に限って採用されてきたわけではなく、B説にも相当な支持があつたことは確かである。領聯の読みが詩全体にどのような影響を及ぼすかについては詳細に検討しなければならぬ。

しかし、どの説に与しようとも、「春望」の領聯がいかに読まれてきたのか、その歴史をたどるのであれば、本稿では簡略にしか触れられなかったが、唐詩の擬人法について再検討するとともに、我が国の古典をも視野に入れて検討の範囲を拡大する必要がある。その際には我が国においては高橋梨一や小杉放庵と中里介山の読み方が存在してい

たことも記憶に留めておくべきではなからうか。

注

- (1) 『解釈辞典』刊行以前のもので目に入ったものでは、内田泉之助『新選唐詩鑑賞』(明治書院、一九五六)が、「花にも涙を漣ぎ、……鳥にも心を驚かす」と読んで、「なおこの前聯を『時に感じて花は涙を漣ぎ、別れを恨んで鳥は心を驚かす』と読んで、時に感ずるもの、涙を漣ぐものは花と見、同じく別れを恨み、心を驚かすものを鳥と見る説(新唐詩選)もある。文法的には無難であろう。しかし花鳥はもと無心、有心は人にある。解釈としては従い難い。」と述べ、目加田誠『唐詩三百首2』(東洋文庫、一九七五)が、「花に涙を漣ぎ、……鳥に心を驚かす」と読み、また同氏『唐代詩史』(目加田誠著作集六、龍溪書舎、一九八一)では、「花にも涙を漣ぎ、……鳥にも心を驚かす」と読んでおり、刊行以後のものでは、輿膳宏『杜甫—憂愁の詩人を超えて』(岩波書店、二〇〇九)、宇野直人『杜甫—偉大なる憂鬱』がある。近年のものでは張忠綱・孫徹『杜甫集』(鳳凰出版社、二〇一四)が、「感時、感傷時局。花漣涙、見花開而漣涙。鳥驚心、聞鳥鳴而心驚。」と説明している。
- (2) 夏松涼『杜詩鑑賞』(遼寧教育出版社、一九八六)も擬人法を用いると見なして以下のように述べる。

領聯是采用擬人手法、渲染詩人憂國思家的痛苦心情。

……「花漣涙」、是說花草也因國家的殘破和人民的苦難而同情而驚恐啼鳴。當詩人在春天的早晨、詩人所看到的是一片寂寞荒涼景象、這更激起他內心的無限苦痛。於是、在他看來、春天早晨鮮花上品瑩的露珠、也成了花的傷心的淚水了、樹間春鳥的啼叫、也成了國破家亡的驚恐哀鳴了。人对花流淚、花对人流淚、人与花的淚水流在一起了、鳥对人哀鳴、人对鳥嘆息、人与鳥的感情融成一片了。這種擬人手法、用來抒寫詩人內心的悲苦、特別深刻有力、在我國古典詩詞中被常常運用。

- (3) 『解釈辞典』は言及しないが、横山伊勢雄『中国古典詩聚花—政治と戦乱』(小学館、一九八四)の指摘も以下に引いておく。

領聯の「花漣涙」と「鳥驚心」の句を、「花(も)涙を漣ぎ」「鳥(も)心を驚かす」と読んで、花と鳥を主格にした擬人化と見る解釈もあるが、この詩の場合は適切でない。花や鳥が人間の悲惨な情況に同情しているとみると、詩情が感傷に流されて弱くなってしまうからである。首聯の山河・草木を承けた領聯の花・鳥はあくまで不変の姿と秩序をもって非情に存在する自然の側のものでなければならぬ。

- (4) 吉川幸次郎『杜甫II』(筑摩書房、一九七二)に、「謡曲『俊寛』が、「時に感じては、花も涙を漣ぎ、別れを恨みては、鳥も心を動かせり」というのも、その影響が、五山の禪僧を通じて、作者世阿弥に及んでいるのかも知れない。」とある。

(5) 同氏「杜甫『春望』の濺涙について」の注(3)に、以下のようにある。

王力『古代漢語』下冊第二分冊(中華書局、一九六四)一三七五頁。高橋君平「杜甫『春望』の解釈」(九州中国学会報)一八、一九七二)も同様の読みを主張する。この読み方では文法上の主語は花と鳥だが、実質的に涙し心驚くのは作者であるので、A〔主語を作者に読む説〕筆者注〕に入れた。

また、同氏「杜甫『春望』の驚心について」の注(4)には以下のように言う。

王力『漢語詩律学』では「春望」の領聯を「花使淚濺、鳥使心驚(花は涙をして濺がしめ、鳥は心をして驚かすむ)」と、「濺」「驚」の自動詞を他動詞として用いた例とする。(『王力文集』第十四卷所収、一九八九年、山東教育出版社、三一〇頁)

王力『漢語詩律学』(中華書局香港分局、一九七三)第一章、近体詩、第二十節、近体詩的語法(上)、1、詞的変性の項では、(五)不及物動詞作及物動詞用(使動)の例として「春望」の領聯が引かれる。

(6) 王瑞来点校『鶴林玉露』巻四、乙編(中華書局、一九八三)による。

(7) 慶安元年(一六四八)京都林甚衛門刊本。和刻本漢籍隨筆集八、汲古書院、一九七三影印。

(8) 小山弘志・佐藤喜久雄・佐藤健一郎『謡曲集二』(小学館、

一九七五)には、「世阿弥作という確証はないが、『能本作者註文』『いろは作者註文』『歌謡作者考』『二百拾番謡目録』等すべて世阿弥の作とする。」とある。

(9) 同書三〇二頁。なお六〇頁には、「時に感じては花にも涙を濺ぐ」とある。

(10) 『おくのほそ道 付奥細道菅菰抄』(岩波文庫、一九七九第一刷、二〇〇七第五三刷)によった。

(11) 表紙に「隣人社発行」とあり、奥付には発行所として「隣人之友社」とある。隣人之友社は「大菩薩峠」のほか、介山の個人雑誌「隣人之友」「峠」などの発行所。『漢詩提唱』(杜甫)では上巻で二五篇、下巻で七篇が取り上げられる。

(12) 『三代の栄耀一睡の中にして』より「夏草や兵どもが夢の跡」までの引用があるが省略した。

(13) 一三頁以降に「春野」として「春望」を引用するが、前後の句は省略する。「春野」は誤植。四三頁では「春望」となっている。

(14) 『中里介山全集』第一七巻(筑摩書房、一九七二)所収。杜甫と白楽天は全集に未収録。なお、「白楽天」までは刊行されたが、予告された「高青邱」以下は未刊。

(15) 「傳」は「傳」の誤り。傳与礪(初字は汝礪)は元・傳若金(一三〇四〜一三四三)。

(16) 「臆」は「臆」の誤り。

(17) 文会堂 一九二・四初版、一九二・五第二版。

(18) ただし原文の「此律体」を「長律体」に、「声調」を「格調」

に改めるなど、改変した箇所がある。

〔付記〕本稿は中国文化学会の大会（二〇一四・六、於北海道教育大学札幌校）におけるシンポジウム「漢詩教材としての杜甫の詩」において口頭報告した「杜甫の詩をどう読むか―『春望』の頷聯」を補訂したものである。当日、御示教くださった参加者に感謝する。

（北海道教育大学）